

## 過疎地域における高齢者の健康と生活の自立に関する研究

著者	飯吉 令枝, 平澤 則子, 小林 恵子, 野口 裕子, 藤川 あや, 外立 直子, 板垣 綾子
雑誌名	看護研究交流センター年報
巻	19
ページ	3-4
発行年	2008-10-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10631/403">http://hdl.handle.net/10631/403</a>

## 過疎地域における高齢者の健康と生活の自立に関する研究

飯吉令枝<sup>1)</sup>, 平澤則子<sup>1)</sup>, 小林恵子<sup>1)</sup>, 野口裕子<sup>1)</sup>, 藤川あや<sup>1)</sup>, 外立直子<sup>2)</sup>, 板垣綾子<sup>2)</sup>

1) 新潟県立看護大学, 2) 上越市安塚区総合事務所

キーワード: 過疎地域, 高齢者, 生活自立, 介護予防

### 目的

過疎地域の高齢者の生活自立において困難なこと, 地域住民の支えあいの実態を明らかにし, 高齢者の健康・生活の変化を早期に見つけるための条件・仕組みや介護予防の対象となる高齢者を早期発見するための仕組みについて検討する。また, 高齢者が自立した生活を維持するための必要な支援内容とその支援のために必要な条件を明らかにし, 今後の介護予防に向けた支援対策検討の一助とする。

### 研究方法

#### 1. 高齢者保健福祉サービス担当者へのグループ・インタビュー

A市B区において高齢者の保健福祉サービスに携わっている者7名を対象とし, 「介護予防に関する課題」「介護予防に向けた支援のために必要な条件」について, 平成20年1月にグループ・インタビューを行なった。インタビューは参加者の許可を得て録音し, 逐語録を作成した。分析はインタビュー記録, 逐語録, 参加観察した情報とし, インタビュー項目に沿ってカテゴリーを抽出した。

#### 2. 高齢者とのコミュニティ・ミーティング

A市B区の3地区(C地区:交通の便に比較的めぐまれている, D地区:医療・福祉施設等が近接している, E地区:高齢化率が高く, 積雪量が多い)の住民を対象とし, 「生活の自立において困難なことや, 地域の支えあいの実態」「高齢者の健康・生活の変化を早期に見つけて助ける仕組み」について, 平成20年2月にコミュニティ・ミーティングを行なった。コミュニティ・ミーティングで話された内容は, その場で付箋紙に記録して参加者と内容を共有すると共に, 参加者の許可を得て録音し, 逐語録を作成した。分析データは逐語録とし, 同じような意味内容を示すものに分類し, カテゴリーを抽出した。

### 結果

#### 1. 高齢者保健福祉サービス担当者へのグループ・インタビュー

介護予防に関する課題として, 『高齢者の生活や健康の変化を早期にみつける仕組みづくりの必要性』『安心してサービスを利用するための基盤整備の必要性』『地域での支えあいの限界と公的支援の必要性』の3つの重要カテゴリーが抽出された。重要アイテムとして, 『高齢者の生活や健康の変化を早期にみつける仕組みづくりの必要性』では「近隣との良好な関係」「高齢者を見守る担当者の取り決め」「見守り高齢者の条件整理」「年代別の介護予防対策」などの8つが, 『安心してサービスを利用するための基盤整備の必要性』では「介護保険以外のちょっとしたサービス」「介護保険サービスの種類と量の不足」「自分でできるといってサービスを利用しない高齢者」「経済的問題からサービスを利用しない高齢者」の4つが, 『地域での支えあいの限界と公的支援の必要性』では「有償ボランティア利用者の増加と提供者不足」「高齢化率の高い地域の支えあいの限界」の2つが抽出された。

介護予防に向けた支援のために必要な条件として, 『困ったときに支えあえる地域のネットワークづくり』『生活基盤の整備』の2つの重要カテゴリーが抽出された。重要アイテムとして, 『困ったときに支えあえる地域のネットワークづくり』では「生活や健康の変化を早期に見つける仕組み」「親族と近隣の関係づくり」「公的サービスと地域の見守りの連動と補完」「お互いを見守る

ための取り決め」などの8つが、『生活基盤の整備』では「高齢者の共同住宅の必要性」「区内巡回バス運行の必要性」「移動販売の必要性」の3つが抽出された。

2. 高齢者とのコミュニティ・ミーティング

「生活の自立において困難なこと」について、E地区は積雪量が多いため、一人暮らしの高齢者は積雪による緊急時の対応の遅れに不安を持っていた(表1)。「地域の支え合いの実態」について、C地区の世代が異なる高齢者同士は交流を持ちにくい傾向があった(表2)。「地域で支えあうための仕組み」について、D地区ではサービスの活用に積極的であった(表3)。

表1 生活の自立において困難なこと

カテゴリー	C	D	E
交通手段が少なく外出に不便を感じる	○	○	○
自力で除雪することが困難である	○	○	○
身体機能の低下により日常生活に不便を感じる	○	○	
積雪による緊急時の対応の遅れに不安がある			○

表2 地域の支えあいの実態

カテゴリー	C	D	E
民同士が人間関係をつくり支えあっている	○	○	○
高齢者世帯では将来の生活に不安を感じる	○	○	○
既存のサービスが活用されていない	○	○	○
住民同士で情報交換するしくみがある	○		○
困りごとはサービスを利用する	○		○
住民同士が交流を持ちにくい	○		
自分なりに工夫して生活している	○		
近所づきあいがないと困りごとが解決しにくい		○	
子どものつながりにより得られる安心感がある		○	

表3 地域で支えあうための仕組み

カテゴリー	C	D	E
住民同士が話し合い助け合う	○	○	○
行政サービスを活用する	○	○	○
家族に相談する	○		
サービス提供者と顔なじみになる	○		
適したサービスや道具を利用してみる		○	
住民同士がサービスの利用を勧める		○	
住民のニーズに合ったサービスを開発する	○		

考察

高齢者の生活や健康の変化を早期にみつけるためには、地域で安否確認をする仕組みづくり等、住民が地域で支える力をつけていくことが必要である。地域住民の見守り活動において生活の変化を早期に見つけるための生活行動項目等の指標づくりも必要と考える。高齢者調査(佐々木美佐子他, 2004)で用いた生活行動項目の活用は、住民同士がお互いのちょっとした生活の変化を早期にみつけるための一助となりうるのではないかと考える。

また、介護予防に向けた支援においては、一括した高齢者支援ではなく、年代、活動能力、地区の実態別等を考慮したきめ細かな支援が必要である。3年前の調査(佐々木美佐子他, 2006)と比較し、有償ボランティアや高齢者ネットワークシステム等の整備は進んできているが、サービスにつながりにくい高齢者へのちょっとしたサービスの基盤整備が必要である。近年、過疎地域では、高齢化の進行により地域での支えあいには限界が生じてきている。公的サービスと地域の見守りを連動し補完しあう、サービスの重層化が今後さらに必要である。

引用文献

- 1) 佐々木美佐子他 (2004) : 豪雪地における高齢者の生活構造とソーシャル・サポート・ニーズに関する研究, 平成14年度新潟県立看護大学看護研究交流センター活動・研究報告書, 9-16.
- 2) 佐々木美佐子他 (2006) : 豪雪地における高齢者のソーシャル・サポート・システム構築に関する研究, 平成16年度新潟県立看護大学看護研究交流センター年報, 11-15.